

国文学研究資料館特別展示目録 二

—久松博士蔵歌論書及び本館蔵国学関係書を中心として—

この展示は久松家より御寄託いただいた故久松潜一博士蔵の歌論書の一部と、旧国民精神文化研究所蔵書の内の数点とからなっております。

目録中の解題は久松潜一博士の主として左記の御著作からの引用によって構成し、全体の記述を整える為に簡単な補足を加えました。

日本文学評論史・至文堂、昭和五十一年版、久松潜一選集所収。

万葉集の研究・至文堂、昭和五十一年版、久松潜一選集所収。

歌論集・能楽論集・岩波書店、昭和四十六年、十二刷、古典大系所収、久松潜一、西

尾実校注。

又、補足記事は主として、和歌文学大辞典（明治書院、昭和三十七年）及び最新の研究成果をも参照しました。

なお、巻末に久松潜一博士略年譜、及び（寄託資料）故久松潜一博士蔵歌論書目録を付しました。

昭和五十三年三月四日

国文学研究資料館

1 俊頼髓脳

源俊頼（天喜三・1055）大治四・1129）著 歌論書

俊頼口伝、俊頼無名抄、俊秘抄、唯独自見抄などとも言う。

「日本文学評論史」古代・中世篇、第一篇、第三章、第二節

俊頼は金葉集の撰者であり、家集に散木奇歌集があり、更に俊頼口伝（無名抄ともいふ）があり、又歌合の判者としてその時代の中心人物であった。——中略——俊頼口伝に就いて彼の見解を探って見ると、心とふしとことばとを対立させて、心を第一とすべきをといひ、

歌のよくといふは心をさきとして珍しきふしをもとめことばをかざりよむべきなり。

と述べてゐる——以下略。

2 悦目抄

鎌倉期の歌論書。藤原基俊の作に擬せられる。鶯箱秘伝抄とも言う。

「日本文学評論史」古代・中世篇、第一篇、第三章、第二節

さうして彼（基俊）には悦目抄といふ歌論書があるとして重んじられたのであるが、これは基俊の系統をひく二条派の偽書であると信ぜられる——以下略——

3 顕昭陣状

顕昭（大治五・1130）不明）著 歌論書 建久五年頃成立

一名、六百番陳状。六百番歌合（建久四・1133秋？）における俊成の判に不服を唱えたもの。

「日本文学評論史」詩歌論篇、序説二

六条家の顯昭が俊成の六百番歌合の判詞に対する批評は内容的方面にわたって居り、顯昭の風情を重んずる立場をよく表してゐる。もとより俊成も幽玄を重んじ余情を尊重してゐるのであつて風情の理解はある筈であるが、歌合の批評としてやゝもすれば陥つてゐる詞の詮索に過ぎて風情を閑却した点があつたのを非難して、歌に風情の重要な点を説いたのは、漸く古代の調和的古典主義から中世の象徴的傾向にうつる過程を示してゐる。

4 古来風躰抄

11—90 (上のみ) 11—89・1—2

藤原俊成(永久二・二二二)元久元・1204)著 歌論書

式子内親王の求めで建久八年(1197)に執筆され、四年後の建仁二年に若干の補訂が行なわれた。

「日本文学評論史」詩歌論篇、補篇一

彼の歌論書として挙げるべきは、古来風躰抄がある。またそれに加へるに多くの歌合の判詞がある。古来風躰抄は彼の建久八年八十四歳の時の著であるから、時代から言つても中世に入つてゐるし、彼の歌論の円熟した時である。従つて風躰抄の言説は十分注意せねばならないが、こゝに見られる中世的な立場は歴史的展開に対する反省といふことが重要な点の一である。世の轉變による時代の推移は俊成のみならず、この時代の人々のだれも感じたことであるが、それを歌の変遷といふ点で自覚したのが古来の風躰の考である。

5 近代秀歌(秘々抄)

11—58

藤原定家(応保二・1162)仁治二・1241)著 歌論書 承元三(1209)源実朝の求めで執筆

実朝に献上した本の手控えに短い前文をつけたものをもとに一般に流布した流布本系諸本と、定家自筆本系統とが残されている。流布本の例歌を全面的に改めた自筆本系諸本、その両方の特徴をあわせもつ秘々抄本系統とがある。本書は秘々抄本系の一写本である。

「日本文学評論史」詩歌論篇、補篇二

両者の関係については、「今はそのかみ」云々の言による流布本の方は承元三年実朝に献上した本であり、自筆本は後に改訂した本であることが明らかである。またそれによって定家は実朝に送った本にあった二十六首を歌観の変化したために削り、後の歌観にもとづいて八十三首を改めてえらんだといふやうに認められてゐる。ところが前に挙げた秘々抄（吉沢博士が一本を所持されてゐるが、私も一本を蔵してゐる）。この写本は「此一帖相伝申者也了俊判」といふ奥書があり、更に、

此一帖松月軒徳翁之愚身相伝始此也 正清

とあつて正徹に伝はつたのをその弟子の正清が相伝してゐる。次に「文亀元酉下春」の奥書があり、この時の書写であるらしい。

6 詠歌大概

11 | 1 / 2 / 3 / 4 · 1 ~ 2 / 5 / 6 / 7 / 9 · 1 ~ 2 / 10 / 11

7 秀歌体大略

11 | 30

藤原定家著 歌論書 成立等未詳、近代秀歌の改稿本とする説もある。

「古典大系」歌論集、久松博士校注

藤原定家の歌論書のうち、古くから重んじられている。成立年代は未詳であるが、細川幽斎の詠歌大概抄に、定家卿六十一歳のころ後鳥羽院第七御子尊快親王に書いて送つたとある。近代秀歌と内容近く、近代秀歌を書いた後の著と見られるし、それも自筆本近代秀歌以後と見られるが、毎月抄よりは以前と見られる。漢文で書かれてあり、それが原形と思われるが、井蛙抄には仮名交り文で引用されており、現に東大国語研究室に仮名交り文の詠歌大概が存するので、仮名交り文も早くから行われたと見られる。——中略—— 添えられている秀歌体大略は、近代秀

歌における例歌に近い性質かとも見られるが、或は独立したもので、それが詠歌大概に添えられたに過ぎないのかも知れない。ただ詠歌大概が短文であるためか、その写本には必ず秀歌体大略が添えられており、同時に成ったものと見るべきかと思われる。歌数は百三首あるが、諸本によって多少の出入がある。

8 毎月抄

11 | 19

11 | 20

11 | 21

藤原定家著 歌論書 成立年次、事情等、不明な点が多く、偽書説もある。

「古典大系」歌論集、久松博士校注

毎月抄というのは、後人の名づけた名称で、定家卿消息、和歌庭訓ともいう。奥書によれば、承久元年七月二日に或人に返報したことになる。一本の奥書や井蛙抄によって、衣笠内府に送ったと古くから言われていたが、古写本には或人とだけあるので、衣笠内府というのも一説に過ぎない。正徹物語には実朝に送ったとあるが、承久元年一月に実朝は弑されているので、実朝では年代があわない。結局ある人というのは何人であるか定め難い。はじめに、初心のうちには本の姿をよむべきであるとし、本の姿を説明して、すなおにやさしき姿であるとしている。そして歌の十体をあげて、その中でも有心体は最も重要であるとし、他の九体においてもよき歌は有心体であるとしている。有心体が様式的にはやさしく艶な歌であり、価値的には心の有る歌であるとしているのである。そして有心体とともに秀逸体の説明をしている。また歌における心と詞との関係、稽古、本歌取や題詠・百首歌などについても説いており、定家の歌論の中心がこの書によって知られる。仮託の書とする説も八島長寿氏等によって説かれているが、大体において定家の書と認められ、愚秘抄・三五記・桐火桶などに比べて遙かに信じうると見られる。

9 桐火桶

定家に仮託した歌論書（鵜鷺系偽書の一）

鎌倉末期頃成るか

「日本文学評論史」詩歌論篇、補篇二

桐火桶は前半においては古代の和歌のことを説き、万葉や古今の歌の秀歌を挙げ、後半は主なる歌人の歌を挙げ、各歌人について批評を加へてゐる。

(a) 桐火桶

私蔵の中、一は版本であるが、歌学大系本解説にある寛永十五年版本ではない。奥書によると、

宝永元年申五月日

書林 万屋清兵衛板

とある。この書は大和綴本半紙版で第一丁、はじめに「和謔桐火桶上」といふ書名がある。鉄斎の朱の蔵書印がある。表紙には「桐火桶上下」とある。挿絵も数所あるが、寛永十五年版と恐らく内容は同一であらう。

(b) 桐火桶

桐火桶だけで一冊になっており、横二十センチ、縦十五センチの横本である。奥に、

此桐火桶者京極黃門定家卿所作而和謔之骨髓也、雖然希世見幸得正本今開板者也

于時寛永十五年九月吉辰

二条通 仁左衛門

となつてゐる。万葉集や古今集の歌が内閣文庫本にあるのに版本系統本にないのは内閣文庫本の増補といふよりは版本系統本の脱漏であると歌学大系本の解題で述べてゐるが、それらの歌の一首をのぞいてこの天正十四年本が版本系統の中でもよい系統の本であることを証明してゐると見られる。

(c) 桐火桶

11 | 71

11 | 70

11 | 69

文安四年本（家蔵一本）は縦十八センチ、横十八センチ楕形本胡蝶装で表紙は紺紙に金泥の花と鳥の模様がある。表紙裏は金紙である。奥に

藤原為繁朝臣

文安丁夷則書畢

とある。文安丁卯は文安四年があるから文安四年本とよんでおく。書写はそれより遅れるやうであるが、近世初期以前ではある。遊紙一丁を隔てて、次に

慶安元一覽

二条殿為繁卿桐火桶全

とあるのは慶安元年の極めと見られるのでこれ以前であることは明らかである。この本も版本系統であるがやゝ異なつてゐるので版本系統Bと言つてもよい。一は終りの所は「此の三かの大事につきて種々の沙汰多し、故如何とならば此三種の神器を秘せむがためなり」以下の所は此の本にもないが、版本では「利口にしたる姿なるべし、可秘事なり」で終つてゐるのに対して、この本ではその次の

あなやすの秘事也と社覚侍れ。この事どもかたのやうなれども子孫を思ふ故かたはしづゝかきつけ侍りぬ。ゆめもらしみする事有べからず。おそろしく

といふ文詞だけは存するのである。

10 愚秘抄

愚見抄・三五記・桐火桶と共に定家仮託書（鵜鷺系偽書）一。鎌倉後期成るか。

「日本文学評論史」詩歌論篇、補篇二

この書は定家の歌論書の中で仮託性の多いものであるが、しかし、吉野時代から室町時代にかけて定家の書として重んじられ、その内容は後に影響する所多く、正徹も正徹物語に述べてゐる定家の歌論は愚秘抄、三五記から引用する所が多いのである。幽玄を余情妖艶とするのも愚秘抄、三五記の所説によつてである。また定家のいふ有心体を理世撫民体として解するのもこの二書によつてゐるのである。ところがこの二書には内容的にも毎月抄や近代秀歌と一致しない所があるが、更にその点を考へる基礎的な問題として愚秘抄や三五記の本文にも種々異同のあることを考へて見なければならぬ。——略——

11 定家十躰

11—65

伝藤原定家著 歌論書

「和歌文学大辞典」久松博士執筆

この書は仮託の書とする説もあるが、信ずべきであるとする説が有力である。十体の説明はなく、例歌として幽玄様五八首、長高様二一首、有心様四一首、事可然様二六首、麗様二四首、見様一二首、面白様三一首、濃様二九首、有一節様二六首、拉鬼様一二首が挙げられてある。定家以後長く行われ、その影響は著しかった。

12 延慶両卿訴陣状

11—49

歌論書 鎌倉時代、延慶三年、定家の血筋を引く京極、二条両家の論争書、すなわち二条為世の奉った訴状（非難書）。為兼の陳状（陳弁書）とそれを反論したものからなる。但し現存本は三条西実隆の抄出。

「日本文学評論史」詩歌論篇、序説二

中世に於ける文学論争としては定家によつてほど歌壇が統一された後、その子の為家の後に三家が分立してからである。鎌倉期では京極家の為兼と二条家の為世との間の論争が著しいし、二条家の方では為世のみならずその周

田の人によって野守鏡も著されてゐる。為兼が玉葉集を編纂するに至るまでの経過には二条派からの種々の圧迫もあり、為兼も政治的な問題と関聯して流されの身にもなつてゐる。また為世との間に延慶両卿訴陳状もなつて居り、二条家の方から歌苑連署事書も書かれてゐる。

13 野守鏡

11 | 39

伝千種有房（建長三・1251〜元応元・1319）著 一説に平輔兼入道心縁上人著

歌論書 永仁三年成立 京極為兼とその歌論を一遍の踊念仏と共に非難した書

「日本文学評論史」歌論篇、第五章、第一節

野守鏡は為家派の作った歌論書で、所謂平淡美を主張してゐる意味で、為兼などの見解とは異なつてゐる。従つてその所説も格別新しく卓見といふのではないが、しかし組織が整然としてゐる点で、中世の歌論書の中でも特異な位置を占めるものである。この作者に就いては文明十一年の藤原親長の跋によつて、千種有房の作と言はれてゐるが、これに対して必ずしもさうでないと言ふ見解も立てられてゐる。しかし有房説に対して積極的に否定すべき点も乏しい上に、有房の著としてふさはしい点もあるので、かつて随筆文学集に収める時に私はなほ有房説を支持したい考を述べたことがある。が、それは別として野守鏡の諸本に就いて年来心がけてゐたが、刊本では群書類従本が唯一のやうであり、写本も私の知つたものでは、神宮文庫蔵の写本、帝国図書館蔵の写本、九条家旧蔵の写本を見たのみで、群書類従本も神宮文庫本によつたやうに見えた。私も神宮文庫本によつて収めておいた。しかし版本としてはその後元禄刊本を手に入れた。それが本書である。

14 井蛙抄

11 | 81・1 | 3

11 | 82

頼阿（正応二・1289〜応安五・1372）著 歌論書 延文五（1360）頃成立

「日本文学評論史」詩歌論篇、補篇一

歌論に於ては二条家の頼阿の井蛙抄や、その一部を抄出した水蛙眼目や、良基の間に頼阿の答えた愚問賢注の所説が二条家の平淡美の歌論を代表してゐるが、頼阿は新見解を述べるよりも従来の歌論の伝統をまもる事に力を注いだので井蛙抄もそのやうな性格を有してゐる。——中略——良基も近来風体抄の中に頼阿の歌を評して

かゝり幽玄に姿なだらかに、ことごとくしくなくて、しかも歌毎に一かどめづらしく当座の感も有しにやとあるのもそれを語つてゐる。それは頼阿の歌論の性格でもあったのである。井蛙抄の第一巻「風体論」では公任の新撰髓腦、俊成の古来風体抄、定歌の詠歌大概と毎月抄、順徳院の八雲御抄の見解を多く引き、「六百番歌合」の判詞や和歌九品、忠岑十体、源承の愚管抄をも引用してゐる歌論集成の観もあり彼の見解は少い。

15 愚問賢注

二条良基（元応二・1320～嘉慶二・1388）の間に頼阿が答える形式をとつた歌論書

貞治二年（1363）成立

二条派の正統の上から見ると、頼阿と二条良基とがある。頼阿には井蛙抄とその雑談の部を抜いた水蛙眼目があり外に良基との問答を記した愚問賢注があり、また良基には室町時代の歌人を評した近来風體抄がある。が、頼阿は二条派の伝統を守つて平淡を重んじた点では極めて忠実であつたが、新しい立場を主張するといふ点は殆どなかつた。従つて道に就いても説く所は尠いが、良基は一面に於て連歌道の建設者であるだけに道に就いても説く所が多い。

16 正徹物語

正徹（弘和元・1381～長祿三・1459）の歌論書。但し、元来、徹書記物語、清巖茶話の二書から成り、それぞれ門

11 | 25 / 26 / 27 / 28 / 29

11 | 87

11 | 88

弟の聞書と見られる。 文安五年頃成立か。

「古典大系」歌論集、久松博士校注

正徹の歌論を見る上に最も重要な書である。正徹は冷泉家の門に入ったが、下りはてた歌の家に拘泥せずとして定家を尊崇した。歌論の根本に幽玄をたてているが、その幽玄が余情妖艶をさしているのは、定家の歌論書でも毎月抄などによらず、愚秘抄・三五記などに見える説によったためである。これは定家の歌論の曲解であるが、定家の歌を余情妖艶と認め、それを正徹自らも重んじ、そのような歌風で一貫した点に、正徹の歌論の特質がある。本書には注目すべき言説が多いが、特に定家や正徹の歌を解釈し、その美的本質を説明しているのは、正徹でなければできないすぐれた意見である。

17 さゞめごと

心敬（応永一三・1406〜文明七・1475）著 歌論・連歌論書 寛正四〜五年成立

「日本文学評論史」総論、第四章、第二節

私は、正徹と世阿弥や心敬と禅竹がそれぞれ同じ傾向をとったのは、偶然の一致ではないと思ふ。心敬は永享の頃までは歌会や連歌の会も多く行はれたと言っている。さうして今の世になっては万の道がすたれ、名を得た人も一人もないと歎いて「応永の比永享年中に諸道の明匠出うせ侍るにや」と言っている。かくの如きは永享・嘉吉の乱から応仁の乱に至る世の乱れの与へた影響と見てもよいと思ふ。

「日本文学評論史」古代・中世篇、第二篇、第二章、第三節

最近私の書架に入った写本は題簽は私語抄とあるが、内容は「さゞめごと」であり、上下両巻が一冊となっている。さうして下巻を見ると「苔筵」本に近く群書類従本とは異同があるが奥書を見ると上巻の終に

寛正第四曆蕤賓上旬於紀州田井庄惣社參籠中、或人連歌之竹馬用心之一篇頻憤望之間依難去、此兩帖頓被任筆、一覽之後則被投炉中由也、此二帖悉以雖可在用捨由候、先出以草案奉所望者也

文明九年十二月十八日

とあり、下卷の奥書には

此奥書上卷同前也仍略之

とあり、別に本云として心敬以外の奥書がある。

18 無言抄

11 | 44

木食上人(慶長一三年・1608没)著 連歌論書 天正年間成立

「日本文学評論史」詩歌論篇、第一篇、第十節

紹巴の連歌観をうけて、より集成的にまとめたのが木食上人の無言抄である。——中略——無言抄には木食上人や紹巴の跋もあるが、天正七年から二年あまりの間に記し、同十四年の頃紹巴の閱を得たとあり、それから十余年をへて慶長二年に跋をかき慶長三年二月の紹巴の跋をそへて世にひろまったとある。天正七年は四十四歳の頃であるから上人の四十代の著である。無言抄の内容は連歌の用語や法式を集大成したもので著者の見解とすべきものは見られないが、こゝにもこの時代の連歌がどのやうに扱はれたかが知られる。

※「日本文学評論史」形態論篇、第一篇、第八節に「木食上人の連歌論」として無言抄についての論考がある。

19 自讃歌

11 | 46

11 | 102

11 | 103

伝頌阿撰 鎌倉中期成立?

編者は不明であるが、後鳥羽院時代より百年以上後のものである事が序文から知られる。編者のものともいわれる

序文には、後鳥羽院が当時の代表的歌人一六人から各の八身づからよめる歌のなかに、よろしきを十首たてまつらしめ給ひて——中略——御みづからの御歌をも此御つるで見せしらしめ給ひける云々とある通り、後鳥羽院・式子内親王・藤原良経・慈円・源通光・源通具・藤原俊成・俊成女・宮内卿局・藤原定家・藤原有家・藤原家隆・藤原雅経・源具親・寂蓮・藤原秀能・西行一七人が各一〇首ずつ合計一七〇首の珠玉集である。但し、後鳥羽院の召しによって歌を奉じたというのは編者の仮託であると言われる。

20 三秘抄

11—57

藤原為家の作と伝えられる。古今集・後撰集・拾遺集についての口伝書。為家に仮託された偽書であるとする説が有力。

21 為尹千首

11—64

冷泉為尹（康安元・1316）応永二四（1417）詠 千首歌 応永二二（1415）年成立 足利義持に詠進したものの。

22 竹園抄

11—12 / 13 / 14 / 15 / 16 / 17 / 18

藤原為顕（生没不詳）著と言われる。歌論書 建治と弘安の頃成立

「竹園抄攷」四（日本歌論史の研究・所収）

竹園抄は十一の項目よりなっている。一、歌可嫌病・二、可対詞事・三、親疎句事・四、六義事・五、取本歌躰・六、返歌躰事・七、題存知事・八、懷紙可書事・九、披講座席事・十、於名物題存知事・十一、風躰事

項目から見ると和歌四式や奥義抄等に見える古代歌論の題目をならべたように過ぎないが、親疎句事は従来の歌論書には見られない。詠歌一体のよせある事に類似はあるが、それにもない新しい内容を有している。その上に他の

項目においても新しい内容を含んでいる。

「竹園抄攷」五（日本歌論史の研究・所収）

竹園抄は量に於て小さい歌論書であるが、為家の説を伝えたとされたために広くよまれたらしく殊に二条家の流れに重んじられた。それが堂上歌学の家でも尊重されたのである。写本が多く伝わり版本も寛永版本に種々の異版があるのもそれを語っている。二条家の流れでは定家以上に為家が重んじられた点もあるのである。それとともに内容に於ても親句疎句の見解の如き連歌の方面に重んじられ、大きな影響を与えたのである。

23 詠歌制詞

11—8

歌論書 近世 詠歌一体（乙本）を増補して、中世以来の制詞をある程度集成したもの。竹園抄（11—17）も同内容を付載している。

「日本文学評論史」近世・近代篇、第三篇、第一章、第二節

制禁の詞は欠陥のある詞といふよりは、ある個人の創造した詞として、所謂ぬしのある詞であり、他人の使用をゆるさない詞をさしている——中略——さうして近世の初め頃までにかくの如き制詞が幾程の数を示してあるかといふに、家蔵の詠歌制詞といふ写本はこれが集成を試みている。この書は奥に

這一冊は元来二三寸ばかりなる無外題之小本也

桜町院仰云往年

靈元院宸翰を染られし一冊也。ところく御幸のおりなど御懐中ありしとなん。あらたに可書写のよし蒙仰謹うけ給、やがて書付て献上畢。此つゝで拝借の事をねがひて借下られ書とゞめぬ。制禁覚悟の大綱此一冊にこそれり。座右をはなたず、尤なをざりにおもふべからざるものなり。

とが出来る。さうして在滿とはその立場に於て反対に立つのであるが、真淵とはその万葉集を尊重する点に一致しながら、なほ部分的に相違があるのである。

28 新学異見

11—40 11—41

香川景樹（明和五・1786～天保一四・1843） 歌論書 文化八年序、十二（1815）年刊 真淵の「新学」（明和二・1765）を批判したもの

「日本文学評論史」詩歌論篇、序説二

近世の歌論に於ける他の重要な論争は真淵の新学に対する景樹の新学異見に見られる論争である。それは万葉主義と古今主義との論争とも言へる。真淵と景樹とは歌に於て真情を重んずる点では近いのであり、また真情と調べとの関係を重んずる点でも近いものがある。たゞ景樹に至って調べに対する、より尊重が見られ、誠実即調といふ境地になつてゐることは真淵よりも一層調尊重に進んでゐるが、それは本質的相違ではない。たゞ真淵に於てはますらをぶりを重んじ力強い調を重んずるに於て、景樹は雅びの調を重んずる点に相違がある。さうして真淵は具體的には万葉集の力強い調を重んじ、景樹は古今集の雅びな調を重んずるに至るのである。

29 言靈辨

11—100

熊谷直好（天明二・1782～文久二・1862）著 歌論書 直好は香川景樹の高弟

「日本文学評論史」近世・近代篇、第三篇、第二章、第六節

この言靈といふ言は万葉集の中にも三所用ゐられてゐるのであって、文字よりも言葉を重んじた傾向、同時に言葉に対して絶対的な力を認める傾向が、言葉に靈が存するといふ信仰を生み出したのであるが、近世に於てこの立場を中心とする歌論を唱道したのは御杖であつたと思ふ。然るに松田武夫氏の好意で景樹門の熊谷直好の言靈弁と

田安宗武（正徳五・1715〜明和八・1771）著 歌論書 近世

「日本文学評論史」近世・近代篇、第三篇、第二章、第一節

歌論書としては宗武に在満の国家八論に対して批評した国歌八論余言と、外に歌体約言とのあることは一般に知られてゐるが、この外に国歌八論余言に対して、賀茂真淵の著した国歌臆説に対する批判書として、臆説剰言があり、この臆説剰言に対して、更に真淵の答へた、「再奉答金吾君書」に対する批評書として、歌論がある。後の二書は宗武の雑著ともいふべき玉函叢説の附録として収められてゐる。——中略——

私の蔵する那之古草と題する写本には歌体約言序や春海大平贈答歌論消息とともに臆説剰言ならびに歌論の二篇も含まれてゐるが、終りに

此三条者玉函叢説田安中納言之中所載也
宗武卿所著

乞得小中村清矩蔵本閱覽之序抄録之焉

明治十年三月一日 中尾五百樹

とある。私の見得た玉函叢説は国会図書館蔵と福井久蔵氏蔵とあるが、附録のあるのは福井氏蔵のみである。さうして福井氏蔵本は小中村清矩旧蔵であるから、私の有する写本はその伝写本である。

27 歌體約言

田安宗武著 歌論書 近世 延享三（1746）年成立

「日本文学評論史」近世・近代篇、第三篇、第二章、第一節

宗武著の歌論書は四部があり（本書、国歌八論余言、臆説剰言、歌論）、これによって荷田在満・賀茂真淵の二人に対して一面には教をうけつゝ一面には自己の所信を明快に述べて論争をも辞せざる宗武の学者的見識を見るこ

宝暦八年仲春

光胤

とあって、靈元天皇の御著のやうにも見られ、寛文から天和貞享の間に作られたと思はれるが、当時に於ける制禁の詞の集成としては最も見るべきものと思ふ。

24 梨本集

11 | 72・1 | 2

戸田茂睡（寛永六・1629～宝永三・1706）著 元禄七（1694）刊

「日本文学評論史」近世・近代篇、第三篇、第一章、第二節

詠歌制詞と梨本集を比較すると、ほぼ同時代の著であるに拘らず、一方が制詞に対して忠実なる態度をとっているのに対して、一方（梨本集）が制禁の詞に対してあくまで反射してゐるのは興味ある現象と思ふ。

25 国家八論

11 | 92

荷田在満（宝永三・1706～宝暦元・1751）著 歌論書 寛保二（1771）年、三十七歳の時、田安宗武に求められ書き上げた。

「日本文学評論史」近世・近代篇、第三篇、第二章、第二節

即ちこの書はその組織的論理的方面に於ては、極めて注意すべきであるが、その立場は新古今集を尊重し、極めて形式的である上に、消極的であったためと、近世に於て文学的自覚の再び目覚めてきた時に当って、新しく唱へられた初めての歌論書ともいふべきものであったので、種々の意味で論難が行はれた。

「日本文学評論史」詩歌論篇、序説二

特に真淵・宗武の万葉主義と、新古今主義との対立という点で国家八論を中心とする論争は重要な意味を持った。

26 玉函叢説

11 | 68

11 | 99（附録）

いふ歌論の草稿本を見るを得て、或は御杖の言靈的歌論が直好に影響したのではないかと推測したが、然しその所説には直接の影響はないやうである。しかし直好が言靈といふ言葉を用ゐたのは御杖の立場から何等か暗示を受けたのではなからうかといふ推測は去らないのみか、桂園派で言靈を如何に解釈したかといふ所に御杖との学説の対比も明らかにされると思ふ。

30 萬葉童蒙抄 (国民精神文化研究所旧蔵本)

カ 2 | 14 · 1 | 26

31 萬葉集僻案抄 ()

カ 2 | 12 · 1 | 3

32 萬葉割記 ()

カ 2 | 11

荷田春満 (寛文九・1669~元文元・1736) 講

「万葉集の研究」(一)、万葉集の新研究 十六

契沖の万葉研究に次いで考ふべきは荷田派の万葉研究である。春満は万葉研究の上にも尠からざる功績を与へてゐる。春満の万葉集に関する著書は、普通に万葉僻案抄と万葉童蒙抄とが挙げられ、ことに童蒙抄は八十巻とあるので春満の主著のやうに思はれてゐるが、童蒙抄は春満の直接の著書ではなく、春満の講義を弟の信名が私案を加へて書きしるしたものであると思はれるのである。万葉僻案抄は享保年間に春満が卷一を註したものであつて春満の著書の中で最も流布されてゐるものであり、これを補ふために講義をもととして童蒙抄を信名が編したものと思はれる。また童蒙抄の続稿といふべき信名の万葉割記が卷十七から卷二十まで作られて羽倉家に蔵せられてゐる。

33 萬葉問答 (国民精神文化研究所旧蔵本)

カ 2 | 19 · 1 | 3

34 萬葉童子問 ()

カ 2 | 13 · 1 | 5

35 萬葉改訓抄 ()

カ 2 | 15

荷田春満講

「万葉集の研究」(一)、万葉集の新研究 十六

万葉集問答は宝永五年の著であって巻三と巻四の一部分とを註してあり、童子問は巻二、巻三の中から疑問を挙げて註してあり、改訓抄は巻四、巻十、巻十一、巻十二、巻十三の部分づつの改訓である。これらによって春満の万葉研究は知られるであらう。春満はその万葉研究の系統に於いては種々の説もあるが、契沖に直接教をうけなかったにしても、その万葉代匠記を見てこれに啓発されたことは、僻案抄の中に代匠記の説を或説として引用してあるのによっても明らかであると自分は思ふのであるが、然し、春満は契沖以外に出て彼の個性を発揮してゐるのである。

36 万葉集和假名訓 (国民精神文化研究所旧蔵本)

カ2―16・1―2

荷田春満講

「万葉集の研究」(一)、万葉集の新研究 十六

和仮名訓は万葉集巻七、九、十、十二、十三の五巻の仮名の訓だけを記した書で巻九、巻十の鼈頭に諸所に記した記事によって春満の講義の稿本であることは明らかであり、宝永六年の六月から九月まで続いている。内容はたゞ和仮名を記したのみで説明を加へてないが、従来の訓を訂正した所が多い。

37 萬葉緯 (国民精神文化研究所旧蔵本)

カ2―3・1―8

今井似閑(明暦三・1657~享保八・1723)著 万葉集の研究資料の纂注書

契沖の万葉研究の直接の影響として、その門弟の今井似閑の万葉緯は万葉に関係ある他の文献を集めたものとして、有益な資料である。

38 今井似閑書置

前回展示目錄參照

久松潜一博士略年譜

明治二十七年十二月十六日 愛知県知多郡藤江村（現、東浦町藤江）に生まれる。

大正八年（二四）七月 東京帝国大学国文学科卒業（「契沖の文献学」）。大学院入学（二年間在学）。「校本万葉集」の「諸説」の項担当。

大正十三年（二九）四月 「日本文学評論史」開講。九月 東大助教。

大正十四年（三〇）九月 「万葉集の新研究」刊。

昭和二年（三二）七月 「契沖伝」刊。

昭和三年（三三） 「日本文学評論史」を再び講義（六年まで）。十月 「藤のうらは」（母ひさし五月死去への追悼歌文集）刊。十二月 「上代日本文学の研究」刊。

昭和九年（三九）六月 「上代民族文学とその学史」刊。十二月 文学博士（「日本文学評論史の研究」）。

昭和十年（四〇）二月 「万葉集考説」刊。英独米に在外研究四月出発。

昭和十一年（四一）五月 帰国。東京帝国大学教授。十月 「日本文学評論史」（古代中世篇。近世最近世篇）刊。

昭和十二年（四二）七月 「西欧における日本文学」刊。（日記の部分は亡き子への手向草）。

昭和十三年（四三）四月 「日本文学評論史」（総論歌論篇）刊。

昭和十四年（四四）五月 帝国学士院賞受賞。

昭和十六年（四六）三月 「国学」刊。

昭和十九年（四九）十二月 「国文学通論」刊。

昭和二十二年(五二)四月 「日本文学評論史」(形態論篇)刊。六月 日本学士院会員となる。

昭和二十三年(五三)二月 「和歌史」(総論古代篇)。三月 「万葉研究史」 六月 「日本文学風土と構成」刊。

昭和二十五年(五五)十月 「日本文学評論史」(詩歌論篇)刊。

昭和三十年(六〇)三月 定年退官。慶応大学教授(三十九年まで)。五月 東京大学名誉教授。

昭和三十二年(六二)七月 「日本文学研究史」刊。

昭和三十五年(六五)一月 御講書始に「藤原俊成と中世歌論」御進講。五月 「日本詩歌概論」 十一月 「古代

和歌史」刊。

昭和三十八年(六八)四月 鶴見女子大学教授(四十七年まで)。七月 「日本歌論史の研究」刊。

昭和四十一年(七一)十一月 文化功労者として顕彰される。

昭和四十七年(七七)五月 国文学研究資料館設立。七月 同評議員会議々長。

昭和四十八年(七八)一月 「契沖全集」 刊行開始。七月 「万葉集と上代文学」刊。

昭和五十年十一月 国文学研究資料館公開講演「国文学の資料的研究の意義」。

昭和五十一年(八一)三月二日 午後〇時三分肺癌のため永眠。従三位に叙。法号宝文院普賢潜一居士。墓所は藤江の安徳寺久松家墓地。六月〜十月「万葉秀歌」(五冊)刊。

(寄託資料) 故久松潜一博士蔵歌論書目録

- 1 歌会記録(重編写・明暦3)
- 2 雨中吟(写)
- 3 雨中吟(写)
- 4 雨中吟(刊・慶安3)
- 5 詠歌制詞(写)
- 6 詠歌制詞(写)
- 7 詠歌大概(写)
- 8 詠歌大概(写)
- 9 詠歌之大概 他(度会貞末写)
- 10 詠歌大概抄(細川幽齋著・刊・寛文8)
- 11 詠歌大概抄(三条西実枝講・細川幽齋編・写)
- 12 詠歌大概鈔 他(後水尾天皇講・写)
- 13 詠歌大概抄箋(刊・文化5)
- 14 詠歌大概註(写)
- 15 詠歌大本秘訣(写)
- 16 悦目抄(写)
- 17 延慶兩卿訴陳狀(写)
- 18 扇合(写)
- 19 臆説剩言(写)
- 20 哥学浅間煙(写・宝暦6)
- 21 柿本備材抄(写)
- 22 歌体約言(渡辺直麻呂写・天明3)
- 23 歌体約言(中尾五百樹写・明治10?)
21)
- 24 歌道口伝秘抄(写)
- 25 歌論往復書(写・天保5)
- 26 歌論往復書(写・文化2)
- 27 綺語抄(公元写・文政7)
- 28 清輔雑談集(刊・安政5)
- 29 清輔袋草紙(刊・貞享2)
- 30 桐火桶(写・承応2)
- 31 桐火桶(刊・宝永1)
- 32 桐火桶(写)
- 33 近代秀歌(正道写)
- 34 愚秘抄(写)
- 35 愚秘鈔 鶴本(写)
- 36 愚問賢注(写)
- 37 愚問賢注(礪斎写)
- 38 擊蒙句法(謄写版)
- 39 顯昭陳狀(写)
- 40 古哥書(写)
- 41 古今伝授切帶口伝(写)
- 42 古今和歌集新釈(謄写版)
- 43 國家八論(本居舜庵写・明和5)
- 44 言靈弁(写)
- 45 古来風躰抄(写)
- 46 古来風躰抄(写)
- 47 鶯箱極秘抄(正道写)
- 48 さゝめこと(写)
- 49 三秘抄(写)
- 50 自讃歌(写・足利末期古写本)
- 51 自讃歌 他(写・慶長7)
- 52 七体七百首(写・寛政9)
- 53 秀哥躰大略(写)
- 54 秀哥躰大略(写)
- 55 俊秘抄(写)
- 56 正徹物語(写)
- 57 正徹物語(写)
- 58 新統歌仙(刊・元禄10)
- 59 井蛙抄(藤原教武写・寛政9)
- 60 井蛙抄(写)

- 61 清話抄 (刊・文政3)
- 62 雑談聞書 (写)
- 63 為尹千首 (写)
- 64 竹苑抄 (里村玄仍筆)
- 65 竹苑抄 (写・延宝7)
- 66 竹苑抄 (写)
- 67 竹園抄 (写)
- 68 竹園抄 (写・慶安3)
- 69 竹園抄 (写)
- 70 竹園抄 (刊・寛永21)
- 71 千種 (写)
- 72 千種 (写)
- 73 貫之集注 (写)
- 74 定家十鉢 (写)
- 75 徹書記 (藤原若水写・寛文2)
- 76 徹書記物語 (日野輝光写・元禄7)
- 77 徹書記物語 (勝野昌憲写・文政2)
- 78 東塙亭話 (写)
- 79 桃岡雜記 初編 (刊)
- 80 答問雜考 (吳竹園主人写)
- 81 時とことなる詞のしらべ (彦磨自筆)
- 82 なしこ草 (中尾五百樹写)
- 83 梨本集 (刊・元禄12)
- 84 新学異見 (刊・文政13)
- 85 新学異見弁 (刊・文政11)
- 86 二条家直伝 (蒼亭吾道写・文政10)
- 87 耳底記 (刊)
- 88 野守鏡 (刊・元禄3)
- 89 秘々抄 (写)
- 90 細川幽斎聞書 (刊・寛文5)
- 91 毎月抄 (写)
- 92 毎月抄 (度会常彰写・享保20)
- 93 毎月抄 (写)
- 94 未来記 (写)
- 95 未来記 (刊・慶安3)
- 96 無言抄 (写)
- 97 八雲抄 卷第三 (写)
- 98 幽斎聞書和哥雜集之内拔書 (写)
- 99 両大人贈答手簡 (橘重浪写・文政5)
- 100 冷泉家秘書 (写)
- 101 六条家抄 (写)
- 102 和歌肝要 他 (写・正徳3)
- 103 和歌口伝 他 (写)
- 104 和歌口伝 他 (写)
- 105 和哥乃三種の大事 (写)
- 106 或問 (勝秀写)

(国文学研究資料館報別冊第一号より)